

【佳作】

織姫の涙

和田真理子・大阪府河内長野市

「ええな、自分の思う人と結婚できて。おばあちゃんは、おじいちゃんと結婚したなかつてん。」

なんと答えていいのかわからなかつた。衝撃の告白を聞いたのは、二十四年前。結婚の報告を祖母にした時だつた。確かに、祖父の葬儀でも涙ひとつ見せなかつた祖母。気丈に振舞つてゐるからとばかり思つてゐた。

大正末期、奈良の田舎で生まれた祖母は、病弱な両親と姉の代わりに、第二人の世話を朝から晩までしてゐた。やんちやな弟たちが近所で問題をおこすと、それほど年のかわらない祖母が親代わりに謝罪に行くことも度々だつたらしい。大叔父たちが、後に祖母に対して感謝の言葉をよく口にしてゐた。

戦争の色が濃くなつてきた頃、祖母は口減らしのため、京都へ奉公に出されることになつた。知り合いの全くいない土地へ家族のためにひとり行くことになつた祖母の心細さはいかばかりだつたかと思う。あまりに辛い思い出を口にすらしたくなつたようで、母ですら祖母が京都で機織りの仕事をしてゐたとは知らなかつた。

京都での生活に慣れないまま数年が経つたとき、祖母は奈良へ呼び戻されることになつた。嫁いでいた姉が病死したのだ。さらに祖母には驚くことが待つてゐた。姉の後妻にならざるを得なかつたのだ。当時は格下の家から嫁いだ者が亡くなつた場合、責任をとつて人を出さねばならなかつたという祖母の言葉に絶句した。まるで、奴隸制度のようではないか……と。

戦争から戻つてきた義兄と二十歳で結婚した祖母は、祖父が大阪で商売を始めることとなり、またもや故郷を離れることになる。母を筆頭に三人の子供を育てながら、住み込みで働く従業員たちの食事や身の回りの世話。寝る暇もなかつただろう。物心ついた頃、お絵描きをする私の横で、祖母が最後にお櫃に少し残つたご飯にお茶をかけ、お漬物と一緒にかき込む「超早飯」を何度も見かけた。そして、休息することなく仕事に戻る。

働きに働いた祖母は、突然手の震えを訴え字が書けなくなつた。脳内出血だつた。まるで、糸がプツンと切れたかのようだつたが、持ち前の辛抱強さでリハビリに励み回復した。しかし、仕事に復帰できなかつたことが大きく影響したのか、どんどん元気をなくし、二度目の出血後、施設に入らざるを得なくなつた。

「一生懸命働いて、ようやくゆっくりできる頃にかわいそうに……」と周りは言つた。だが、お見舞いに行くたび、言葉はなくとも穏やかな表情で、じつと見つめてくれる祖母の

瞳は優しかった。

施設での生活が十年になつた頃、肺炎をくり返すようになつた。呼吸が荒く、見ているのも辛いとき、思わず言つてしまつた。

「おばあちゃん、よう頑張つたね。もういいよ。何も心配せんと、ゆっくり眠つたらいからね。」

私の言葉に、祖母の目には涙が溜まつた。話せなくとも、言葉は理解できていたのだとと思う。祖母の涙を見たのは、それが最初で最後だつた。あまりにも辛いことが多すぎて、泣くことができなくなつていたのだろうか。祖母の中で、泣いたら負けという気持ちがどこかにあつたのかもしれない。いや、泣いても何も解決しないとの数々の経験がそうさせていたのかもしれない。

その翌日、祖母は旅立つた。九十一年を駆け抜けた。最期には間に合わなかつたが、まだ温かく、すやすやと眠つているかのようだつた。

思えば、いつも他人ファースト。自分の気持ちを表に出すことがない祖母は、悲しいドラマやニュースを見ても感情を表すことはなかつた。常に人と人の間に立ち、人どうしの気持ちが絡まらないように、自分の周りにいる人が気持ちよく過ごせるようにしていただ。祖母と出会う人たちが縦糸と横糸のように交差した。まるで、機織り機のような祖母の人生。祖母が京都でどんな布を織つていたのか残念ながら実物を見ることはできない。だが、祖母が自らを犠牲にしてくれた家族や周りの人々は、柔らかな布のようだ。祖母が残してくれた最高の織物だ。彼らに包まれ、育まれた私は祖母に感謝してもしきれない。何よりも、祖母が祖父との結婚を承諾していなければ、私は今ここに存在していない。

「おばあちゃん、好きな人いてたん？」

「おつた。」

二十四年前、もっと聞いておけばよかつた。織姫様のようだつた祖母が、心の彦星様と今頃会えているといいのだが……。